

## 藤井忠男先生の転任にあたって

釜江常好（物理学教室）

藤井忠男先生のご性格は、研究室のセミナーや打合せに出席するとすぐに判る。横文字の混じった声高な議論が続き、新入りの大学院生が平気で教官や先輩を論破し始める。煙草のけむりとコーヒーと高笑いが部屋のインテリアとなり雰囲気をつくる。先生のアメリカ生活が長かったこと、楽道家で声高でないと言われ、出世しないと言われる素粒子実験分野の性質、それにも増して開放的な先生のご性格が相（騒？）乗作用しているに違いない。その先生が生まれ故郷の神戸に転任されることになった。部屋や実験装置は引き継いでも、あの雰囲気まで残せるか不安になる。

先生は昭和23年に本学部物理学科をご卒業後、約6年間東大理工学研究所、神戸大学理学科に務められました。昭和29年にシカゴ大学大学院に入学し、昭和32年にPhDを取得された後、シカゴ大学エンリコ・フェルミ研究所、ブルックヘーブン国立研究所に勤務され、生れたばかりの巨大加速器による素粒子物理実験の若手研究者として活躍されました。当時のブルックヘーブン国立研究所は世界最高エネルギーを誇るAGSシンクロトロンが稼働を始めたばかりで、毎月のように新しい発見が続いていたのです。先生は陽子・陽子散乱で核子の励起状態を系統的にしらべる実験で、多くの共鳴状態を見出し、そのスピン等を同定されました。先生のお仕事で私にとって印象深かったのは、自分が取組んだ研究テーマ（中性K中間子の崩壊）に日本人の名前、T. Fujiiが出ているのをプリンストンでの大学院生時代に知った時のことです。日本国内に素粒子物理実験を根付かせたいと願う人達に説得され、東大原子核研究所に着任された

のは昭和40年だったと聞いています。今の大学院生には想像もつかないと思いますが、光電子増倍管を1~2本単位で輸入し貴重品扱いする時代だったのです。その中で、数本のシンチレーション・カウンターと小さな電磁石だけで $\gamma$ 線によるK中間子発生およびKA系の研究を完成させ、原子核研究所を世界に売り出されたのは、国内の研究者に強い感銘を与えました。以後理学部物理学科に移られてからも、ブルックヘーブン時代の延長とも考えられる $\gamma$ 線を使った核子の励起状態の研究が続けられた後、高エネルギー物理学研究所の陽子シンクロトロンの完成を機に活動の中心を筑波へ移されました。

藤井先生の研究生活に一貫して言えるのは、自分達の研究費、人数、経験を冷静に判断し背伸びしすぎず着実に進むことだと思います。保守的と取られるかも知れませんが、そうでなく、「物理屋は物理の成果で判断される」とのお考えが強いのだと思います。「如何に新型で高価な装置を使っても、物理の成果が出せないのならだめだ。」そう教えられて来たような気がします。

藤井先生の明るい、フェアなご性格は、国内外の研究者が先生に寄せている絶大な信頼でもはっきり判ります。長年にわたり原子核研究所、高工研、学術会議物研連、種々の科学財団、IUPAP、日米科学技術協力事業などの運営の中核となり、揺籃期にあった日本の素粒子物理実験を、欧米に互する今日にまで育て上げられた一人でもあります。また本学においては、数多くの優秀な卒業生を研究者や社会人として送り出されて来ました。

この様なご活躍は、神戸大学理学科に移られた後にも続くものと思いますが、本学を去られ

る機会に、私達一同、今までのご恩に感謝の意を表したいと思います。また同時に、学会や研究会で、煙草の灰の舞う四角いフェルト地を囲

んで、あの楽しい雰囲気にならせて頂ける様、お願いする次第です。